

# 日本語の移動構文「V-テクル」についての覚書

## 有田節子

### 1. 分析対象

本稿が分析対象とするのは、現代日本語の移動動詞「来る」がいわゆる「補助動詞」として動詞の第二中止形（以後「V-テ」と呼ぶ）に接続した表現（以後「V-テクル」と呼ぶ）である。V-テクルは、複合動詞の一つと見なされるのが普通である。複合動詞には語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二類<sup>\*1</sup>があり、V-テクルを含む「テ形複合動詞」は、統語的複合動詞に分類される。語彙的か統語的かを定める主たる基準は、前項動詞が動詞としての性質を保持しているかどうか（益岡・田窪 1993）である。また、前項にさまざまなタイプの動詞をとること、前項動詞が受身形、使役形などの形で現れることなども特徴としてあげられる。これから見ていくように、V-テクルのVは、「来る」単独ではとらない項を独立にとることができ、さまざまな語彙特性を持った動詞が現れ、受身形、使役形をとることもあるという点で、統語的複合動詞とみなされる。

- (1)a 太郎が手紙を送ってきた （他動詞、生物主語）  
b 雨が降ってきた （自動詞、無生物主語）  
c 手紙が送られてきた （受け身）  
d 花を使いに持たせてきた （使役）

### 2. V-テクルの二類型

V-テクルには次の(2)のようにクルが基準位置（通常は話し手の居場所あるいは視点がおかれる場所）に向かってくる移動の意味を付け加える場合と、(3)のようにVの表す事象の相（アスペクト）を表す場合がある。

- (2)a 犬が歩いてきた b 太郎が荷物を抱えてきた  
(3)a 雨がふってきた b 太郎が懸命に戦ってきた

この二つのタイプは、後項動詞（クル）の統語的性質に関して違いがある。移動タイプにおいては、Vとクルの項の同一性が見られるが、アスペクトタイプの場合には見られない。たとえば(2)aにおいては、「犬」は「歩く」の項だが、「くる」の項（仮に「移動者」としておく）でもあり、両動詞が同一の項を持つ。(2)bにおいては、「荷物」は「抱える」のみがとる項だが、「太郎」は両者が共にとる項である。一方、(3)aも(3)bも「雨」「太郎」はそれぞれ「降る」「戦う」の項であると言えるが、「くる」の項とは言い難い。（「雨がきた」「太郎がきた」ということをそれぞれの文が表しているのではない。）

次に、クルがVとは独立に項を取りうるかという点についても違いがある。移動タイプの方は、V単独では取りえない「移動先」をとりうるが、アスペクトタイプの方のクルが単独で項をとることはない。

- (4)a \*犬がこっちに歩いた, \*太郎が学校に荷物を抱えた  
b 犬がこっちに歩いてきた, 太郎が学校に荷物を抱えてきた  
(5)a 雨がここに降った, \*おなかがわたしにすいた

\*1 影山（1993）、影山・由本（1997）に詳しい。

b 雨がここに降ってきた、\*おなかがわたしにすいてきた

移動タイプの項の同一性には、移動体と移動先が同一の場合、移動体のみが同一の場合、移動体と経路が同一の場合、移動先のみが同一の場合、がある。

(6)a 息子が家に帰ってきた / 戻ってきた ( )

b 太郎が手紙を家に送ってきた

(7)a 犬が歩いてきた / 泳いできた ( )

b 太郎が本を持ってきた / 制服を着てきた

c 桃が流れてきた / ボールを投げてきた

d 太郎が弁当を買ってきた

(8)大きな桃が川を流れてきた ( )

(9)a 大きな岩がここに落ちてきた ( )

b 木がここに倒れてきた

のクルには「移動先」を新たな項として加える働きが認められる。一方、        、        のクルにはそのような働きは認められない。クルの「移動動詞性」という点では、        がもっとも高く、ついで        、        、そしてアスペクトタイプのクルという順になっている。実際、        、        の用例において、V 単独の例と比較して、事態の局面が焦点化されているように思われるものがある。<sup>\*2</sup>

(10)a 太郎が手紙を送った b 太郎が手紙を送ってきた

(11)a 大きな岩が落ちた b 大きな岩が落ちてきた

(10)b の場合は、事態のいわば完成の局面が焦点化されている。そのことは、a, b の例に「～が、まだ届いていない」という表現を続けることによって、よりはっきりする。(坂原 1995)

(10)'a 太郎が手紙を送ったが、まだ届いていない。

b \*太郎が手紙を送ってきたが、まだ届いていない。

a の方は自然なのに対し、b の方は不自然である。

(11)b は完成の局面を焦点化する読みと、落下の途中を焦点化する読みの二つがある。(11) a には前者の読みしかない。この違いは、L 形にするとよりはっきりする。

(11)'a あ、大きな岩が落ちる。 b あ、大きな岩が落ちてくる。

(11)'a の方は、落ちそうになっている岩の状態を意味し、(11)'b はすでに落ちはじめている岩の状態を意味する。ここにアスペクトタイプへの連続性が認められる。

V-テクルの分析には、移動動詞の一つであるという観点と、事態の局面の焦点化に作用する(「視点動詞」の一つである)という観点<sup>\*3</sup>が必要である。

### 3. 移動事態の構成要素

「来る」は移動動詞である。「移動」を「位置の変化」だと仮定すると、移動という事態

\*2 も持続の局面が焦点化されていると言える。

\*3 「視点」という観点からの日英語の移動動詞の分析には大江(1975)の優れた業績がある。大江では「行く」「来る」の選択と視点との関係について詳細に分析されている。本稿は V テクルのみを対象としているので、大江の研究との関連を十分に検討するに至っていない。その点については稿を改めて論じるつもりである。

は、位置を変える存在物（移動体）と、二つの地点（移動元、移動先）、そして、その二つの地点を結ぶ線（経路）から構成される。「方向」は経路に付随するものだとすると、移動動詞は、移動元、移動先、あるいは経路（方向）のいずれかが語彙化され、残りは項や付加詞として、あるいは文脈の中に表される。

日本語は、方向を重視する言語だと言われている。英語などの言語が結果を重視するのと対照的である<sup>\*4</sup>。純粹に移動を表す動詞としては「移る」があげられるが、「移る」が移動を表す複合表現として生産的に用いられているとは言えず、「方向」を語彙化した「行く」「来る」の方が基本的な動詞とみなされる。

「来る」は、基準点をXとすると、Xに近づく動きが語彙化されたものである。その意味では、移動の経路が語彙化されていると言える。「来る」は結果、すなわち移動先への到着を必ずしも含意しない。

(12)a 太郎が来た

b 太郎が学校に来た

c 太郎がぬかるんだ道に来た

d \*太郎が学校にぬかるんだ道に来た

e \*太郎がぬかるんだ道を学校に来た

移動先（この場合は「学校」）と経路（この場合は「ぬかるんだ道」）が同時に現れると不適格な文になる。この点は「帰る」や「戻る」とは対照的である。

(13)a 太郎は家に帰った      b 太郎はぬかるみ道を家に帰った

(14)a 太郎は会社に戻った      b 太郎はぬかるみ道を会社に戻った

「来る」自体が移動先を語彙の意味として含んでいなくても、移動先が移動という事態の構成要素であることには変わりない。「太郎が来た」という表現が、到着を含意することがあるのはそのためである。

また、移動は状況論的には、「移動前の状況に存在していた移動体が移動後の状況に存在するようになること」（中田 1996）として捉えられる。「太郎が来た」という表現は、移動後の状況に太郎が存在することを伝えるだけでなく、移動前の状況に太郎がいたことも間接的に伝える。

重要なことは、ここで問題にしている到着、移動前/移動後の状況は、移動という事態の構成要素であって、「来る」という動詞の語彙の意味自体に含まれるのではないという点である。「来る」は単独でも移動以外の用法（「頭にくる」「ぐさっとくる」など）を持つが<sup>\*5</sup>、その場合、移動体の到着や移動前/移動後の状況が言及されることはない。

一方、前節で見た「事態の局面の焦点化」は、移動という事態ではなく、「来る」の語彙の意味から出てきたものである。基準点Xに話者の視点が置かれることにより、「来る」は視点動詞的性質を帯びる。

\*4 宮島（1985）に日本語とヨーロッパの言語の移動動詞を比較対照した分析がある。

\*5 山本（2000）に詳しい。同論文はV-テクルの表す多様な意味（多義性）を「来る」の多義性に求めている。

#### 4. 移動前状況、移動経路

移動タイプの V-テが移動方法・様態を表すものと、移動する前の動作を表すものとに分けられる。本稿は前者を移動経路に付随するものとして、後者を移動前状況に付随するものとして考える。

- (15) a 太郎が泳いできた b 太郎がボールを投げてきた c 花子がスカーフを巻いてきた  
(16) a 太郎が弁当を買ってきた b ちょっと公園で遊んでくるよ<sup>\*6</sup>

移動方法・様態を表すタイプは、先行研究でも指摘されているように、V に現れる動詞の語彙的意味に特徴がある（吉川 1976 など）。「泳ぐ」「走る」「投げる」のような移動動詞が現れた場合には移動方法の意味になり、「スカーフを巻く」「着る」「持つ」のように「身に付ける」に類する意味を表す動詞の場合は、移動の様態を表す。一方、移動前状況を表すタイプの V に現れる動詞は意志性の動詞という特徴を共有する以外は、さまざまな動詞が現れうる。例にある「買う」のような限界性（telic）動詞も、「遊ぶ」のような非限界性（atelic）動詞も、移動前状況タイプに現れうる。そればかりでなく、移動方法、様態タイプに用いられる動詞も、移動前状況に解釈されうる。その逆はない。

- (17) a (家で)スカーフを巻いてきた  
b プールで泳いできた、運動場{を/で}走ってきた

以上の V の語彙特性に関わる制約の有無は、移動経路が移動という事態のいわば内的構成要素であるのに対し、移動前状況が移動という事態の外的構成要素であるということに帰せられると思われる。

ここで「移動前状況」と呼んでいるものは、従来「継起系」とされてきたもので、「移動経路」と呼んでいるものは、従来の「同時系」にほぼ対応する。移動タイプを継起系と同時系に分類するという従来の研究がとった立場は、テの継起用法と同時（様態）用法に関連づけようとするものである（吉川前掲、Hasegawa1996、坂原前掲など）。ところが、近藤（1985）<sup>\*7</sup>、Matsumoto（1996）でも指摘されているように、テクルの「継起系」とテ形の継起用法は統語的ふるまいが違う。

- (18) a 本を買ってきた（「継起系」）  
b 本を買って読んだ（「継起」のテ）  
c 本を買って、捨てた  
(19) a 本を[[買ってもし]なかつ]た  
a' 本を[[買ってきもし]なかつ]た  
b 本を買っても[[読ま]なかつ]た  
b' 本を[[買って読みもし]なかつ]た

\*6 同じ移動前状況に付随するといっても、「買ってくる」と「遊んでくる」は、前者が一方向の動きなのに対し、後者は双方向の動き（遊びにいて、もどってくる）であるという点で異なる。この点については近藤（1985）に詳しい。本稿はこれ以上立ち入らない。

\*7 近藤は上代、中古の文献の例を引き、『「てゆく」「てくる」に含まれる「て」の要素は既に上代・中古語の段階でいわゆる接続助詞とは異なっており、「てゆく」「てくる」という複合形をなしているものと考えられる。構文論的な証明は別に必要であるが、用例の多さや意味的に複合動詞形と大差のないこと（「出てくる」と「出ててくる」との比較などから）で、そのように推定するのである』（近藤:26 下-27 上）と述べている。

- c 本を買っても[[捨て]なかつ]た
- c' 本を買って、[[捨てもし]なかつ]た。(「捨てる」を否定)
- (20)a その本が買ってこられた
- b <sup>??</sup>その本が買って読まれた
- c \*その本が買って、捨てられた
- (21)a 僕はその本が買って来たかった
- b <sup>?</sup>僕はその本が買って読みたかった
- c \*僕はその本が買って、捨てたかった

(19)の否定の焦点に関して、V-テクルは a の形式をとっても a'の形式をとっても「買ってくる」を否定するという意味は変わらないが、テ形接続は b の形式をとると b'の形式をとるとでは意味が変わる。前者は「読む」が否定される解釈になるが、後者は「買って読む」が否定される解釈になる。また、(20)、(21)に見るように、「買ってくる」は受身形、願望形になるが、「買って読む」では難しい。したがって V-テクルとテ形接続文を同一視することは適当ではなく、「継起系」「同時系」をテ形に求めるのも問題があると思われる。

## 5. 始動相と継続相

移動タイプの中に事態の局面の焦点化が認められるものがあることを見た。これは、クルの移動動詞性が希薄になると、移動という事態を構成する「移動元」「移動先」という概念が曖昧になり、「来る」自体に内在する「基準点 X 向きの動き」だけが残ることによる。方向は移動経路に付随するものなので、V で表される動きの経路あるいは過程が焦点化されることになる。

特に興味深いのは、(11)で見たように、「岩が落ちる」「木が倒れる」のような例において、「落ちた結果」「倒れた結果」が焦点化される解釈だけでなく、「落ちつつある」「倒れつつある」という「持続過程」が焦点化される解釈もあるという点である。つまり、話し手がどこに焦点を置くかによってその解釈が決まる。

このタイプと連続的なのが、次のような「出現」の意味を表す用法である。

- (22) 私たち兄弟は、上の五人が一年置きぐらいに相次いで生まれ、私だけが忘れたころに、ひょっこり生まれてきたのである。(忍ぶ川)

この用法の表す事態に物理的な移動は含まれない。したがって基準点は移動体の着点ではなく、話し手がいる(あるいは視点をおく)時点ということになる。出現という事態は、基準時点以前には存在しなかった状態が基準時点以降に存在すると捉えなおすことができる。それはちょうど、移動という事態を状況論的に捉えた場合と近似する。移動先すなわち移動体の着点を基準にすると、移動事態の発生により、基準点に存在しなかったものが基準点に存在するようになる。出現の用法も同様に考えることができ、「非存在 存在」の局面がテクルによって焦点化されるのである。次の変化用法も、出現用法と同様に考えることができる。

- (23)私はエディの反対の理由が少しわかってきた。(一瞬の夏)

基準時点以前と以後での状態変化の局面がテクルによって焦点化されている。

この二つの用法は、ある局面が焦点化されるという特徴だけでなく、その状態あるいは変化が基準点以後も持続するという含みも持つ。出現用法では存在の持続、変化用法では変化の持続すなわち漸次的変化の解釈になる。特に後者の場合、テイル形にしてテクル形をとら

ない例と比較するとその違いがはっきりする。

(24)a 私はエディの反対の理由が少しわかってきている。

b 私はエディの反対の理由が少しわかっている。

テクルの例(a)では漸次的変化が持続しているという解釈になるが、テクルをとらない例(b)では、変化の結果の状態の解釈になる。

持続の含みは、「来る」に内在する基準点  $\dot{x}$  に近づく動きが、「空間」から「時間」に写像されることにより、基準時点以前から基準時点にかけて成立するという意味を持つことにより出てくる。そのため、テクルはいわゆる継続動詞と相性がよく、後に見るように継続動詞はテクルと結びつくことにより、動作が過去から現在にかけて継続して成立するという持続の面が強調される。

(25)そのうちに、雨がふってきました。

(26)おたがいに励ましあってきた、この年月。

ここで、無意志性の継続動詞+テクルが始動相を表し、意志性の継続動詞+テクルが継続相を表すという従来の分析(森田 1968、近藤前掲、益岡・田窪前掲など)を再検討する。確かに無意志性の(25)は始動相を表すように見え、意志性の(26)はそうではないようである。ただし、始動相とはいっても、「~し始める」のような始動相専門の形式とは異なる。以下に見るように、「しはじめてくる」という実例があることから、両者の文法的機能に相違が見て取れる。

(27)夜が少しずつあけはじめてきた。(沈黙)

(28)警視庁から戻った星の心のなかで、徐々に怒りがたかまりはじめてきた。(星)

(29)そろそろ暑い陽がのぼりはじめてきた。(放浪)

(30)潮が満ちはじめてきていて、礁に碎ける波音がひとしきり高くなった。(榆家の人々)

これらの例において「てくる」は始動相として働くというよりはむしろ、「~しはじめ」が進行あるいは持続していることを表しており、この持続性は「~し始める」という形式には含まれない。

テクルの始動相も、「出現」や「漸次的変化」の場合と同様に扱うことができる。基準時点以前にはなかった動きが、基準時点以後に存在するようになる、その局面が焦点化されているのである。本来同質の動作の継続を語彙の意味として持つ動詞(継続動詞)において、変化の局面を取り出すとすれば、「動きはじめ」すなわち始動の局面しかない。もうひとつの可能性である「動きおわり」すなわち動作の完結の局面は、クルに内在する方向性とは逆向きになるという点で、テクルによって取り出されることはない。<sup>\*8</sup>「動きおわり」は、基準時点以前にあった動きが、基準時点以後に存在しなくなり、基準時点以後に「非存在」が

---

\*8 先に見たように、移動タイプのテクルでは、完結の局面が焦点化される場合があるので、ここの主張と一見矛盾しているようだが、移動の完結とは移動体が移動先に到着することで、基準点に移動体が「存在」することを意味する。したがって、アスペクトタイプの場合とはちがって完結の局面がテクルによって取り出されうる。

持続するということになってしまい、不適當である。<sup>\*9</sup> 始動の読みは、話し手にとって「観察可能」<sup>\*10</sup> な動きであれば以下に見るように無意志性に限ったことではない。

(31)にわかに会場がどよめいてきた。

(32)学生が急に耳をかたむけてきた。

(33)太郎が笑顔を見せてきた。

一方、基準時点において話し手にとって観察可能でない動きの場合は、始動の局面が焦点化されることはなく、基準時点以前(過去)から基準時点(現在)にかけて成立するという持続性だけが残る。意志性の継続動詞は、話し手が動作主体に視点を置きやすく、観察可能でないのが普通なので、始動の局面が取り出されることはなく、過去から現在までの持続が表されることが多い。ただ、意志性の動詞であっても先に見たように始動相を表すこともあるし、また、次のように、意志性の動詞とは言えない動詞でも継続相を表すこともあり、意志性、無意志性は典型例というだけにすぎない。

(34)これまでずいぶん苦労してきた。

(35)彼女にはずっといじめられてきた。

## 6. 反復性と経験

前節でテクルが継続動詞と相性がよいことを述べた。また、出現、変化を表す動詞も、非存在 存在の局面、変化の局面を焦点化する働きをテクルが担うという点で、ともに相性がよいと言える。では、テクルが出現、変化、継続性のいずれも持たないような動詞をとった場合にどうなるか。たとえば「死ぬ」「消える」のように、ちょうど「出現」とは対極に位置する「消滅」の意味を表す動詞は、テクルではなくテイクとむすびつき、消滅の過程を表す。

(36)最後の蠟燭が消えていった。

(37)たった一人で死んでいった。

このような動詞にテクルを接続させ、「消えてくる」「死んでくる」とし、解釈しようとする、「消える」あるいは「死ぬ」という事態が繰り返し行われる解釈になる。

(38)蠟燭が(次々と)消えてきた。

---

\*9 坂原(前掲)では、本稿とは別の立場から分析されている。そこでは、V-テクルの始動アスペクト用法を「来る」単独用法における「バスが来た」の場合(バスが視界に入っただけで「バスが来た」といえる)と同様に考えている。そうすると、「来る」単独用法に移動の完結を表す用法があるように、V-テクルのアスペクト用法においても事件の完結を表す用法もあっていいはずなのだが、その用法は見られない。そのことを坂原は「ブロッキング」で説明している。すなわち『単純な表現である事態を指せるなら、複雑な表現がその事態を指すのは禁止される』ということである。ところが、言語運用においては、単純な表現と複雑な表現が同じような事態を表すことはある。たとえば、最近よく耳にする「～になります」「～になっています」という表現の間には形式の複雑さに対応するような意味の違いは感じられない。(「こちらがお手洗いです」「こちらがお手洗いになります」「こちらがお手洗いになっています」、(佐藤 1999))したがって、ブロッキングで説明することは適當ではない。

\*10 坂原(前掲)でも、「始動アスペクトでは、一般的に、話し手は観察者の立場をとるだけで、自分自身が移動主体となって時間軸上を進んで来るという事件の概念化はしない。(中略)これに対して、継続アスペクトでは、話し手自身が時間軸上の移動主体であってよい」という指摘がある。

(39) (これまで多くの人が) 死んできた。

また、「殺す」「倒す」「壊す」のように、対象に変化を及ぼす限界性の動詞にテクルを接続させた場合は、V-テが移動前状況を表す移動タイプとして解釈されるか、あるいは、行為が過去から現在まで繰り返し行われたという解釈にもなる。

(40) a 人を殺してきた

b 大きな木を倒してきた

c 大事な置物を壊してきた。

(41)a (多くの) 人を殺してきた

b 大きな木を(何本も)倒してきた

c 大事な置物を(何回も)壊してきた

(38)(39)(41)の例に含まれる反復性はVの意味特性から出てくるものではない。むしろ、V-テクル構文自体の意味だと考えなければならない。すでに述べたようにアスペクトタイプのV-テクルは状態、変化あるいは動作の持続を表す。クルに前接するVには一定の持続を可能にする過程性がなければならない。ところが、消滅事態に内在する過程は、クルとは逆向きであり、消滅後になにも持続しない。また、「殺す」「倒す」のような動詞によって表される事態も持続性が内在しない。このような場合、V-テクル構文は、Vを特定の事態ではなく、(類似の)事態の集合として再解釈することを強制するのである。

勿論、事態の集合への再解釈は、Vが過程性を内在するような動詞の場合にも起こりうる。

(42) 関係者が(つぎつぎと)現れてきた。

(43) 低気圧が日本列島に接近したために、西日本から雨がふってきた。

(44) 彼とは何回も話し合ってきた。もう、何も言うことはない。

類似の事態の集合への再解釈は、さらに次の「経験」用法(森田前掲)の存在も説明することができる。

(45)a 親子の縁もきってきた b 出産もしてきた

の例は「親子の縁をきる」ことや、「出産をする」ことを繰り返し行ったという解釈にはなりにくい。むしろ、親子の縁を切ることも、またそれに類することもいろいろした、という解釈、また、出産をただけでなく、出産に類することもいろいろした、という解釈になる。つまり、とりたてて詞「も」を使って、他にも類似の事態があることを暗示することにより、テクル構文が要請する過程性が保たれているのである。

## 7. まとめ

本稿は動詞の第二中止形と移動動詞「来る」から構成される複合動詞(V-テクル)の表すさまざまな意味について、「来る」の持つ移動動詞性と視点動詞性の二つの観点から考察した。その結果、特に次の五点について独自の見解を示した。

) V-テクルの移動用法のなかで、Vが本来とらない移動体を項としてとるタイプはクルの移動動詞性が最も高く、V-テクルは全体として移動事態を表す。その際、V-テが「移動前状況」に付随する動作を表す場合と、「移動経路」に付随する動作を表す場合とがある。

) V-テクルの移動用法で、)以外のタイプのクルは移動動詞性と視点動詞性の両方を備え、V-テクルはVが表す移動事態の局面を取り出す。ここにアスペクト用法への連続性が認められる。



) 移動が空間から時間に拡張されると、V-テクルのクルの持つ視点動詞性は、基準時点以前に存在しなかった事態が基準時点以後に存在するものとして、いわば、基準時点における観察可能性として捉えなおされる。一方、移動動詞性は、基準時点以前から基準時点にかけて成立するという、いわば持続性として捉えなおされる。

) 従来から指摘されている始動と継続のアスペクチュアルな対立は、V で表されている事態が基準時点において観察可能であるかどうかには依存する。

) 反復性、経験的意味は、(V で表される事態が持続性を内在しない場合は義務的に)V-テクルのV が個別の事態ではなく類似の事態の集合として解釈された結果出てくる。

## 参考文献

- 今仁生美 1990 「V テクルとV テイクについて」 『日本語学』 Vol. 9-5, 54-66. 明治書院
- 影山太郎 1993 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 影山太郎・由本陽子 1997 『語形成と概念構造』 研究社出版
- 近藤泰弘 1985 「補助動詞『てゆく』『てくる』の用法 <視点の補助動詞> 研究序説」 『日本女子大学紀要 文学部』 34
- 宮島達夫 1984 「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」 『金田一春彦博士古希記念論文集』 第二巻言語学編 三省堂: 456-486.
- 森田良行 1968 「『行く・来る』の用法」 『国語学』 75 集, 75-87.
- 森山卓郎 1987 「方向・移動の形式をめぐって」 『語文』 49, 29-40. 大阪大学国語国文学会
- \_\_\_\_\_ 1988 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 中田一志 1995 「移動動詞の意味論」 『大阪外国語大学論集』 14 号, 37-53.
- 成田徹男 1979 「動詞の意味と格 - 「移動」に関する動詞を中心に - 」 『人文学報』 132, 47-64. 東京都立大学人文学部
- \_\_\_\_\_ 1981 「空間的移動を意味する『～てくる・～ていく』」 『人文学報』 146, 1-20. 東京都立大学人文学部
- 大江三郎 1975 『日英語の比較研究 - 主観性をめぐって - 』 南雲堂
- 坂原茂 1996 「複合動詞『V て来る』」 『言語・情報・テキスト』 Vol. 2, 109-143. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
- 佐藤琢三 1999 「ナツテイルによる単純状態の叙述」 『言語研究』 116, 1-21.
- 田中茂範、松本曜 1997 『空間と移動の表現』 研究社出版
- 山本裕子 2000 「『くる』の多義構造 - 『くる』と『～てくる』の意味のつながり - 」 『日本語教育』 105, 11-20. 日本語教育学会
- 吉川武時 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 金田一春彦編 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房 157-327.
- Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese-A syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Kuroshio Publisher & CSLI
- Hasegawa, Yoko. 1996. *A study of Japanese clause linkage: The connective TE in Japanese*. Kuroshio Publisher & CSLI.